

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBLなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎月テーマとなるブランドを取り上げていこう。今号はマッキントッシュの初期モデルをご紹介します。

Mcintosh Laboratory

1974年にFrank H. McIntoshとGordon GowによってMcintosh Laboratoryとして設立された。1949年頃に開発された第1号機のパワーアンプ 50W-1 は市場では高出力ながら低歪みであった事が話題となり、その後の改良型の50W-2、A-116が業務用途を主に活躍していた。今ではMcintosh はガラスパネルとイルミネーションが輝くデザインが有名だが、当初は業務用がメインという事でパワーアンプは全てハンマートーン塗装で仕上げられていた。また、プリアンプ等もAE-1C、104、C-8と次々と開発され、1954年頃にはコンシューマー向けのMC-30、MC-60、1957年には当社初のモノラルFM/AMチューナーMR-55が発売され高品質な総合アンプメーカーとなっていった。

本文 / 田中伊佐資

製品解説 / 岡田康司(アトリエJe-tee代表)

撮影 / 小林新彦(彩館舎)



50W-2

1951年頃に開発され、当社の実力を高い次元で安定させたモデル。出力管に6L6が2本、電源部の整流回路に5U4Gが2本搭載され、当時は他社でも歪みの少ない業務用アンプは25W出力が最高のところ50W出力が可能なアンプであった。パワー部とアウトプット部の干渉を防ぐために独立している構造で、現在のハイエンド機では珍しくないが、当時すでにこの構造が用いられ、また同社が特許を持つパイファイバー巻トランスとユニティカップドサーキット回路が当時50Wという高い出力にもかかわらず歪み率0.5%以下を実現した。



C-4

1954年にそれまでのプリアンプとデザイン一新され発売されたプリアンプでオーディオコンベンセーターという名称であった。電源部を持たずパワーアンプとの接合によって電源を供給されるのが基本動作になっていたが、同時にC-4Pという電源を持つ製品もあった。コントロールつまみは5個付属しており、先に開発されていたC-104の後継機種という存在であるが、C-104には搭載されていなかった11段切り替えのレコード用のイコライザーであるCompensatorsつまみが搭載され、より繊細なイコライザー補正が可能になった。



C-8

1955年に先に開発されたC-10Bの後継機としてプロフェッショナルオーディオコンベンセーターという名称で発売される。こちらも電源部を持たないC-8と電源部を持つC-8Pがあり、その後1959年頃にステレオ再生に合わせてP-8Sが発売され、C-8とのセットでボリュームがステレオコントロールできるようにする。特徴はC-10Bにも搭載されていたフォノイコライザーの補正スイッチである高域用のロールオフが5個、低域側のターンオーバーが5個搭載され、高域/低域のトーンコントロールを組み合わせると1024通りの補正が可能であり、レコード再生をきめ細かくコントロールできるプリアンプとして現在でもアナログマニアの中では重宝されている。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

Mcintosh Laboratory



50W-2のアウトプット部。出力管に6L6が2本搭載し、50Wの出力が可能



50W-2のパワー部。電源部の整流回路には5U4Gを2本搭載。特許を持つパイファイバー巻トランスとユニティカップドサーキット回路により、歪み率0.5%以下を実現



マッキントッシュの出自であるスコットランドのタータン・チェックをイメージしたロゴマークが印象的



パワー部とアウトプット部は干渉を防ぐために独立構造となっている

望郷の念を込めたタータンを纏う マッキン観が変わった初期モデル

この連載もいつのまにか6年目に突入しているが、ほんとうにB.L.アルテック、マランツ、マッキントッシュなどのド真ん中メインストリーム系ヴィンテージが出てこない。これについて、反骨精神が旺盛なアトリエJe-teeの岡田さんは「そんなのありふれていて、面白くないでしょ」という弁だ。しかし今回はマッキントッシュだ。おやと思ったが、主役をやるパワーアンプ50W-2のラベルを見ながら「なにしろタータン・チェックですからね」と一目置いていた様子なのだ。確かに赤地に緑のチェックが入った柄になっている。なんのことも思わなかったら、創業者のフランク・H・マッキントッシュはスコットランドの移民、それゆえこのタータンは故郷をシンボライズしているというのだ。ウォーカーのショートブレッドが食べたくなってきたところで、急にほくのマッキン観が変わった。マッキンといえどマッキン観が黒ボダイに碧眼メーカー。望郷の念を込めたタータンはずっと残しておいて欲しかった。

完全モノラル。カートリッジはGEバリレラ、プレーヤーはRC A70D、スピーカーはジェンセンのインベリアル一発。まずはヘレン・メリルのエマシー盤から、皆さんご存知「ユード・ビー・ソ！ ナイス・トゥ・カム・ホーム・トゥー」。54年録音だからアンプの製造時期とたいたい合っている。C4で聴くと色気ムンムンで濃すぎるくらい濃い。ほんまに20代前半の声ですか？ という感じ。ともあれパワーアンプの駆動力はかなりのものだ。となると和ポップスはいかにと「ザ・ビーナッツ・ヒストリー・ヴォー！」から、「情熱の花」をかけてみる。ヘレンのパターンでいくとビーナッツが変にパター臭くなってもおかしくないが、切々とした二人のハーモニーはきれいに伸び、エネルギーみなぎる昭和録音を感じた。プリをC8に変え、そのままビーナッツ。ノスタルジックな陰影が消えてスケがよい。設計を20年くらい新しくしたよう。イコライジングのスイッチをパチパチ変えると面白いように音が変わる。続くヘレン・メリルは脂っ気が抜けて若返った。バリッとしたライになった。岡田さんは「こっちもいいかも」とスピーカーをオールド・インベリアルに変えた。妖艶に迫ってくるヘレンならこれでキマリだ。呑み込まれるかのようにスピーカーへ接近して、同軸2ウェイに顔を付き合わせて、聴き惚れた。